



Archaeological Laboratory, Co., Ltd.

アルカ通信

ARUKA Newsletter

NO.166
2017.7.1

*考古学研究所(株)アルカは石器と縄文土器・土製品等の実測・整理・分析を強力にバックアップする企業です。

加曾利B式土器

— E.S. モースと坪井正五郎のはざままで —

鈴木 正博

● 第16回 ● 日本石器時代総論に向けて

椎塚貝塚の定量的選択に補足するならば、椎塚貝塚には巨大深鉢と「蓄火器」以外にも日常什器の使い勝手をも思わせる特徴的な「鉄鉢」が顕著に認められ、「以上解説セル土器中、同形ニ属スルモノノ**最も多キ**ハ鉄鉢形ニシテ、殆本貝塚土器ノ一特性トモ云フベク、」(ゴチック体は引用者、以下同様)と指摘される。加曾利B1式の特徴で、大森貝塚にも見られるが量的には少ない。

ここで改めて坪井正五郎が西ヶ原貝塚出土人工遺物の体系的網羅的分類と列島における類似関係、及び計量化という先史考古学の土台構築を図り、それを以てモースの大森貝塚における曖昧記述を科学的に近代化へと導いている真最中という状況を認識しなければならない。何故ならば、八木英三郎・下村三四吉が報告の範としたのは報告冒頭に敬意を表した坪井正五郎ではなく、土器の代表例の解説と類例の「**多い少ないの別**」に留まるモースの定量的選択であり、椎塚貝塚の整理・報告と並行して進められた西ヶ原貝塚の精確性に基づく計量化ではないからである。

学史的には標本剥がしを始めとして山内清男が指摘する「土器区分」に関する坪井正五郎の複雑な葛藤も想定されるが、他方で定量化から計量化への道程を確立し普及しようとするその矢先に西ヶ原貝塚報告を明治28年1月を以て(未完)のまま中断し、「**コロボックル風俗考**」(明治28・29年)へと転換した背景が重要に思われてならない。それには阿玉台貝塚報告(明治27年4月)における「**部落及年代ノ相異**」論争と距離を

置く必要がある。

重視すべきは阿玉台貝塚での「**土器製作ノ両式**」(「陸平式」と「大森式」)において「**人種ノ相違ヲ認ムルコト能ハズ**」との大方の結論でなければならない。相異は由来が不明であることが多く、年代区分としての「土器区分」には説得力のある根拠を見出せないことから、以後「**両式**」を以て**石器時代人民の特徴**として議論を進める「コロボックル思考法」の確立となる。

その後の展開で検証するならば、列島規模の「**日本石器時代総論要領**」(明治30年)を纏めるための画期的な「**コロボックル風俗考**」に向け、**椎塚貝塚の経験を契機として既に触れた標本の新たな役割と検出成績の良かった土偶等**を含めた総合化へと研究の歩みを進めることになる。

その後については暫く措き、現実には傍で椎塚貝塚の整理・報告に邁進する両名にも言い分があり、その内容は簡単明瞭で面白く、かつ本質的である。それは坪井正五郎が西ヶ原貝塚で分類したように整然とは椎塚貝塚の土器が分類出来なかったことへの言い訳であり、土器の考察の最後に置かれた一項「**土器紋様ノ一斑**」に纏められる。

有体には言えば分類基準が策定できないだけであるが、それでも「浮紋」と「沈紋」に大別したり、「**土器形状ノ大小ニ從テ紋様の精粗アル**」構造を見抜いたりしつつも、「其ノ小形ニシテ精巧ナルモノニ至ラハ、紋様モ種々ニ変化複雑ヲ極ム。」として三宅米吉の磨消縄紋を用いて多様な在り方等を強調するなど、最後は「**今此等ノ紋様意匠ヲ解剖説**

明セシニハ数頁ニ盡クスベキニ非ザルヲ以テ、之レヲ他日ニ譲リ、ココニハ、唯本貝塚所出土器ノ紋様意匠ハ、**大森貝塚土器ノ紋様意匠ニ類スル所アリト云フヲ以テ満足セン。**」と結び終わる。しかもこの方針は阿玉台貝塚でも変わらない程の確信となる。

さて、坪井正五郎の開発した「土器様式名称」の推奨では遺蹟ごとに資料の違いが浮き彫りになるだけに「**相異の土器区分論**」ではその違いを説明すべきという由々しき困難が待ち構えている。では、どうすべきであろうか。

それこそが西ヶ原貝塚において実践した「**類似の形態連繫論**」に他ならない。椎塚貝塚と阿玉台貝塚は関東地方に限定される制約での考察であり、その制約を打ち破り、列島各地を貝塚土器で連繫させることを企図するならば、人類学教室蔵の全ての土器を対象とした類似関係を確固たるものにしなければならない。それには「土器区分」ではなく「**形態連繫**」に意義を認めて列島を縦横連携させる必要があり、ここに椎塚貝塚と阿玉台貝塚の議論から昇華された「**コロボックル思考法**」が登場する。

畢竟、西ヶ原貝塚の**破片考古学**(悉皆調査と分類、その類例及び統計)は、椎塚貝塚のような完形・準完形資料が多く直感的かつ細部まで比較可能な**標本考古学**とは情報の質という点で全く次元の異なる資料論である。坪井正五郎は標本考古学の重要性を標本の情報量に基づく新たな役割と認識した上で、破片考古学には類例による列島展望に意義を見出すことになる。

※巻頭連載は隔月です。次回は再び神村先生です。

目次

■加曾利B式土器 日本石器時代総論に向けて(第16回) 鈴木正博 …1
■考古学の履歴書 ことのはじまり(第9回) 間壁忠彦・間壁霞子 …2

■リレーエッセイ マイ・フェイバレット・サイト(第159回) 戸田英佑 …3
■考古学者の書棚 『播磨国風土記のひみつ』 藤田 淳 …4

考古学の履歴書

ことのはじまりー「..それでは 何だ」(第9回) 間壁 忠彦・間壁 葎子

3. 固まってしまった瓦経(4)

前回までに述べたように、この粘土塊になっていた瓦経は、安養寺第三経塚とされた。これと1mも隔たらぬ位置に並んで埋納されていた第一経塚も瓦経塚であったが、こちらは焼成の良かったことから、偶然に20年以上も前の1937年に発見され、国指定重要文化財になっていた。

この第一瓦経塚の瓦面に刻まれていた経典の文字を、かなり見慣れていた私たちは、第三瓦経塚の整理が進む中で、こちらの瓦経も同一人物の文字に違いないと感じていた。筆跡鑑定などには縁遠い者だが、共に埋納されていた法華経もあり、大量に同じものを見るうちに、書写は同一人物だろうと思えたのである。しかも第一経塚と違い、第三経塚では10種以上の異なった経典が刻字されていたが、これらも全て同一人物の文字に思われた。

この様な事を言うと、当時流布していた経典を手本に書写したのだから、文字の区別が明瞭に出来ないのでは..と疑問視されそうだが、実は塊状となっていた方形瓦経中に、5枚ばかり色の異なった瓦経が混在していた。形態や野線の状態もまったく同じだが、瓦の製作時などが多少は異なっていた可能性もあるものだ。その中で良好に判読できた心経の1枚は、明らかに筆跡が異なっていた。

また他所の瓦経塚で、同一の経典文字を見ても、それぞれ明らかに個性があり、多くの書写人物の判明している瓦経では、人物別の筆跡もうかがえる。

安養寺第一瓦経の文字は、どの文字も一字ずつ丁寧に書かれ、一行の文字数も17字の原則に極めて忠実で、しかも文字を校正した痕まである。書写した人物の真面目で几帳面な性格を思わすものであった。第三経塚でも淡く細い線で見えない文字にも、多くを見ていくうちに同じ性格が見られたのである。

こうした性格のおかげで、一度存在が判明した経典の場合、現代の活字本経典でも、1面10行・17字立てで正確に割付、枚数や表裏を推定しておけば、瓦経上でよく読める文字の数字分が、表裏で判明し、其の文字と位置が推定割付と一致すれば、全面を判読する必要なく経典の推定が出来たのである。しかしあまりにも原則通りの現代経典そのままといえる瓦経上の経典に、こちらの根気だけが求められるような、面白みが無い整理..という、経典には罰当たりな気分にもなっていた頃である。

「これは確かに法華経巻五の11枚目、安楽行品第十四に違いないのだが？」文字の位置に2行のずれがあった。経典の2行分が抜けた状況を示すものだった。「あれほど正確な書写をしていた人物も、やはり人間」..其の時はむしろ嬉しくなったのである。

しばらくして、上記の経典と全く同じものが、今度は推定割付通りの形で出現した。この時の整理原本には、「先の写経の間違いに気付いて書き直したのか」との書き込みがある。この時はやはり几帳面な人だったとも思った。しかしこの書き込みの上には、おおきなバツ印もある。

そのうち「法華三昧行法」と明確に経名の読み取れる、経典の頭初部分瓦が発見された。しかし仏典に全く素人の私たちにはこの経典が大蔵経内で、どうした部類に含まれるかも分からず、

当時の頃までに知られていた、経塚埋納経典中でも見られず、探すのに最も苦労した経典であった。

『大正新修大蔵経』内には、発見された経名は無かったが、やっとの思いで、内容が最も似たもの二種を見つけた。中国隋代の智顛による撰の「法華三昧懺儀」と慈覚大師円仁(794-864)が天台独特の法会用に完成したともいわれる「法華懺法」である。前者はかなり長文で、後者は前者の一部を用いながらも異なっており、しかも一方で、法華経の安楽行品の始まりから最初の偈(げ・教義を詩句で表現した部分)の終りまでを取り込んだものであった。

先に間違いとした法華経の安楽行品は、実は法華三昧行法の部分だったのだ。それで後に整理原本に記した感想にバツをつけていたということ。しかし安養寺発見の法華三昧行法は、両種の経典とも違っていたのである。円仁が伝えたとされる「法華懺法」に安楽行品があったとはいえ、安養寺本は両者の中間形とも言えた。ただ願文に列挙されていた、埋納経典名には「懺法」とだけ記されていたのである。

安養寺瓦経を報告し、関係した論考も多少世に問うたが、この遺跡以外の瓦経に関しての小論も公にしてきた中で、わが国では最古の鳥取県大日寺瓦経(延久三年・1071)でも、安養寺の行法と同じ行法が、書写されていたことに気付いた。

また、安養寺調査より後に印刷された、金沢文庫内の天台典籍内に「法華三昧行法」の経名を持つ経の所在を知ったが、これは中国の「法華三昧懺儀」に極めて近く、異本かと思われるもので、安養寺本の行法ではなかった。

金沢文庫本が印刷されてなお後の、1991年に佐賀県築山瓦経塚が発見された。この経塚は天養元年(1144)造営で、大日寺や安養寺瓦経塚より半世紀も後の造営である。ここでは現在も天台の法会で用いられている、円仁の経典「懺法」が瓦経上で確認された。(詳細は、私たち最後の編集『倉敷考古館研究集報 22号』2016年6月参照)

円仁死後200年もの後に出現した瓦経塚であるが、現代も天台で用いられる「懺法」は、まだ流布本でなかったのか。この頃は、主要経典は不変でも、人の生き様に関わる「行」となると、まだ流動的な面があったのだろう。真面目な信徒にも、やはり大きな変動期だった結果が、この瓦経塚ということか。

間壁忠彦 略歴	
1932年	岡山県児島郡甲浦村(現岡山市南区)郡に生まれる
1951年	岡山県立操山高等学校卒業
1955年	岡山大学法文学部法学科卒業
1954~1973年	(財)倉敷考古館学芸員
1973~2006年	同上館長
1968~1998年	広島大学、1968~1980岡山大学非常勤講師(博物館学)、他に熊本・九州・愛媛・鳥取・千葉大学へ博物館学非常勤講師出講
1982~2005年	就実女子大学非常勤講師(考古学)、ほかに島根大学へ考古学非常勤講師出講
2006~2015年	(財)倉敷考古館学術顧問
間壁葎子 略歴	
1932年	岡山市門田屋敷(現岡山市中区)に生まれる
1951年	岡山県立操山高等学校卒業
1955年	岡山大学法文学部史学科(日本史専攻)卒業
1955年	岡山大学法文学部副手(池田家文書整理)
1956~2015年	(財)倉敷考古館学芸員
1979~1986年	中国短期大学非常勤講師(歴史学)
1985~2004年	神戸女子大学非常勤講師1年を経て助教授(1991年まで)教授(2004年まで)、以後同大学名誉教授
1995年	明治大学で論文博士(歴史学)

隔月連載です。次回は岡田淳子先生です。

Uレーエッセイ

マイ・フェイバレット・サイト 159

伊豆逋信病院敷地内遺跡 ～静岡県函南町

戸田 英佑

伊豆逋信病院敷地内遺跡は、箱根山西麓より南西方向に、中小河川により画されながら緩やかに伸びてきた放射状の丘陵の一つである平井台地に位置します。

この平井台地の末端近くは比較的幅広で、平坦な地形を呈し、通称「平井原台地」と呼ばれ、弥生時代以降連綿として集落が経営され、函南町域においては最大規模の集落群が形成され、現代に至るまで居住地域として恰好の地を占めています。

遺跡内はNTT東日本伊豆病院をはじめ、住宅地が形成されており過去にも14次に及び発掘調査が実施されています。

今回紹介するのはNTT東日本伊豆病院新築工事に伴い、平成24年度から25年度にかけ発掘調査を実施した「第107地区」です。調査面積は約6,400㎡です。

同遺跡の西端に位置するV地区の発掘調査により、平井原台地西端では弥生時代後期の集落が形成されていたことが分かっています。

今回の発掘調査により検出された遺構は、竪穴式住居113軒(4世紀代8軒、古墳時代後期14軒、奈良・平安時代54軒、時期不明34軒)、掘立柱建物跡16棟、円形周溝9基、溝状遺構37基、柱穴2,870基、不明遺構87基。

円形周溝は調査区中央付近から北側にかけ検出されました。墳丘はすでに削平され遺存していませんが、周溝内埋土の出土遺物から古墳時代前期後半頃の円墳群と考えられます。

4世紀代に入ると、当遺跡の南東側に集落が広がりを見せるようになります。住居址の分布状況から、円墳を意識し、墓域と集落が区分されていたと考えられます。

5世紀代の住居址が検出されておらず、従前の調査同様、この時期における集落経営の空白が生じるという状況が認められました。

6世紀後半～7世紀代になると住居址の分布域が広がり、比較的規模の大きな集落が形成され始めます。当遺跡と隣接する十二天遺跡(第8地点)では、古墳時代初頭に東端寄りに方形周溝墓と、それに関連をもつ円形周溝墓が造られます。古墳時代を通じ方形周溝墓を避ける形で住居が営まれ、8世紀前半(奈良時代前半)に方形周溝墓の溝のコーナー部を壊して営まれていました。周溝はすでに埋没していましたが、マウンド(台)を認識し、これを避けて造られたものと考えられます。伊豆逋信病院敷地内遺跡でも同様の状況が認められます。



▲第107地区全景

8世紀代には当遺跡内全域にわたって住居址の分布域が拡大していきます。

9世紀前半代に空白が生じ、9世紀後半から10世紀代の住居址群の分布が

認められました。9世紀前半代に集落規模の縮小、または一時的に途絶する可能性が考えられますが、今後の発掘調査により明らかになっていくものと思われます。

出土遺物の主なものとして、古墳時代の鉄製品(刀子など)、奈良・平安時代の住居址から完形および完形に近い土師器類、土師器甕、須恵器が比較的多く出土しています。

その中でも、8世紀後半代の墨書土器(駿東型の土師器杯)5点、鍔帯金具2点、人形土製品2点など、伊豆逋信病院敷地内遺跡ではこれまで例のない遺物が出土しました。SH50から出土した人形土製品は、1体は全長10cmほどで烏帽子の型がみられ、両手を前で腕組みしたような形態をしています。もう1体は足(脚)部のみ残存。祭祀や呪術に用いられたものと考えられますが、その用途については今後の調査課題と言えます。



▲人形土製品

過去の調査報告にて、国指定史跡「柏谷横穴群」との関連性から、房戸の存在が指摘されています。その房戸が複数集まり郷戸を形成し、郷戸を中心とした集落が各所に営まれ、その一集落が平井原台地上の伊豆逋信病院敷地内遺跡に営まれていた可能性について触れています。

律令国家体制の下で伊豆国田方郡は13郷から成っていたようで、すべての郷が比定されているわけではなく、国指定史跡「柏谷横穴群」の300基を超える横穴数と平井原台地上に営まれた集落を中心に、函南町・三島市南東部にかけて、一郷の存在が予想されています。(伊豆逋信病院敷地内遺跡第Ⅱ次発掘調査報告書：1984年報告より)

今回の発掘調査で初めて出土した人形土製品等は、それを紐解くきっかけになると期待されます。

平井原台地周辺の集落を取りまとめるような影響力を有し、且つそれらを取り込む形で規模を拡大したのが伊豆逋信病院敷地内遺跡だとすれば、律令体制の下、当地域における中心的な存在として位置付けられるのではないのでしょうか。

これまで実施されてきた発掘調査成果と、今回の大規模な発掘調査の成果が結び付き、これまで以上に集落の成り立ち・変遷を知るうえで重要な資料を得ることができました。

私自身、本格的な発掘調査は7年ぶりであり、これまで現場補助や応援という形で調査に従事したことはありましたが、担当者として調査現場を受け持ったのは初めてであり、過去従事した現場作業の記憶をたどりつつ、必要なものをあれこれ考え、試行錯誤しながら調査業務に従事しました。

現場では現地表面から2m以上掘り下げた中で作業をし、冬場は寒風が吹きつけ、手がかじかみ、夏場は風通しも悪く、直射日光が降り注ぎ、熱気と湿気が立ち込め、連日現場内の気温は40℃を超えるような中、黙々と作業にあたってくれた作業員の方々には頭の下がる思いです。

本調査に際し、ご助言ご協力を賜った関係各位には改めてお礼を申し上げます。次第です。

※次回のマイ・フェイバレット・サイトは下濱貴子さんです。

考古学者の書棚

「播磨国風土記のひみつ」

是川 長／神戸新聞総合出版センター (2011)

藤田 淳

平成25(2013)年は、和銅5(713)年5月3日に風土記編纂の官命が発せられてからちょうど1,300年後にあたり、伝本が残る『播磨国風土記』の舞台である兵庫県、特に播磨地域では、風土記編纂1,300年を記念した事業が数多く実施された。私の勤務する兵庫県立考古博物館でも特別展『播磨国風土記－神・人・山・海－』を4月23日(土)～6月18日(日)にわたって開催し、多くの方々に観覧いただいた。

私が展覧会を担当することになったのが、その約2年前。困ったことに『播磨国風土記』については、まったく知らないという訳ではなかったものの、ほとんど素人の状態に近かったのである。井上通泰氏の『播磨国風土記新考』のような大著もあったが、素人が取り組むには難敵であった。そんな時に、まさにタイミング良く2011年5月に刊行されたのが本書である。

筆者の是川長氏は兵庫県教育委員会で埋蔵文化財行政に携われたこともあり、いわば私の大先輩にもあたり、考古学に関する知見も深い。本書は『播磨国風土記』を読み解く手法として考古学の研究成果と照らし合わせることに重点を置かれている。展覧会では『播磨国風土記』に記載された伝承を発掘資料と関連付けて展示したいと考えていたので、展覧会の構成を考える上でも大いに参考となった。

本書は大きくは二部構成で章立ては以下のとおりである。

- I 播磨国風土記の世界を探る
 - 第1章 播磨国風土記の世界
 - 第2章 伊和大神信奉
 - 第3章 伊和里と伊和君
- II 播磨国風土記の世界を考古学で検証する
 - 第1章 倭王権の進展と播磨地方
 - 第2章 倭王権の政治体制の整備

第I部ではまず、『播磨国風土記』の成り立ちについて、時代背景や編纂に携わった人物、特色などについて語られる。特に、品太天皇をはじめとする天皇、渡来人、伊和大神に関する説話や伝承の多さが、その特質として挙げられている。

天皇に関しては品太天皇の48か所と景行天皇の7か所を大きく引き離して、極めて数多く登場することが、表にして分かり易く示されている。これに限らず、第1部では、郡ごとの文字数、里の地味、里・村・島・山・川など登場する自然環境、説話で長いものなどが、表を用いて示されており、理解しやすい。

渡来人に関しては、是川氏の地元でもある古代山陽道の邑智駅家について、周辺の古墳群や窯跡の調査成果や『令義解』の規定などをもとに、邑智駅家の設置が邑智里の成立につながり、その里長の人物像として渡来人との関りが強く示唆されている。6世紀～7世紀後半の周辺遺跡の様相を詳細に検討されており、地元への愛着が感じられる。

また、『播磨国風土記』を最も特色づける存在として、伊和大神がある。伊和大神は『古事記』や『日本書紀』にはまったく登場せず、『播磨国風土記』だけにその名を遺す神である。かつ

ては、播磨全域で信奉される播磨の守護神的な存在であったが、倭王権との関係で抑え込まれていったと読み解き、その過程を(1)播磨独自の土着神として信奉されていた段階、(2)ここに出雲を中心とする大汝命の信奉が播磨に広がり、本来の神である伊和大神信奉と一体化する段階、(3)倭王権の播磨への政治的支配を物語る段階に分け、考古資料にもとづいて検討されている。

その時期については、(2)段階を西播磨地域での突線紐式銅鐸の分布と青谷上寺地遺跡における豊富な鉄製品の出土を重ね合わせ、畿内と日本海を結ぶ「南北ルート」が成立したと考えられる弥生時代後期終わり(2世紀末)を想定されている。(3)段階については、飾磨郡伊和里にある大汝命と火明命との闘争説話を、伊和君を中心とする播磨勢力が倭王権につながるの中央勢力に敗北した状況を示すものと捉え、伊和里の比定地と考えられる中にある姫路市長越遺跡での庄内式甕の出土状況から、弥生時代終末期(3世紀前半)と考えることもできるとされている。その当否は別として、信仰の対象である神に考古資料から挑もうとする姿勢には頭が下がる思いである。

第II部では、揖保川、加古川、市川といった播磨の代表的な河川流域に存在する大型古墳を中心に、倭王権と播磨との関係を論じている。その中で吉備との関係や石棺材としての亀山石の開発、製鉄あるいは鍛冶集団、加古川の水運などについても、考古資料や記紀などの文献史料をもとに播磨地域と倭王権が密接な関係にあったことが明らかにされている。

そうした中でも、しばしば第I部で取り上げられた伊和大神や渡来人は常に意識されており、この二つが『播磨国風土記』を特色づける大きな要素であることを強く感じさせられる。

また、巻末には史料として、伊和大神や渡来人、大汝命、天日槍命、品太天皇などの記載がある箇所を抜き出して、訳文が掲載されている。どのような記事がどこにあるのかが一目でわかるようにまとめられており、ありがたい。

『播磨国風土記』についてほとんど予備知識のなかった私が、無事展覧会を開催でき、多くの方々に観覧いただくことができたのは、本書のおかげといっても過言ではない。また、展覧会をとおして『播磨国風土記』への地域住民の関心の高さもよく理解できた。展覧会から4年が経つが、今でも『播磨国風土記』に関する講演の依頼がある。序文には「播磨国風土記に出てくる多くの伝承、説話のすべてを解説するのは別の機会にゆずりたい」とあり、続編が楽しみである。

アルカ通信 No.166

発行日 2017年7月1日
 企画 角張淳一(故人)
 発行 考古学研究所(株)アルカ
 〒384-0801 長野県小諸市甲49-15
 TEL 0267-25-0299
 aruka@aruka.co.jp URL : http://www.aruka.co.jp